山と博物館

第27巻　第7号　1982年7月25日　大町山岳博物館

北アルプスの喜作祭
喜作新道

大天井岳（二九二二メートル）の頂上直下の分岐点から赤岩岳（二七六七メートル）、東鎌尾根伝たいに、北アの主峰槍ケ岳に至る喜作新道は、大正六（一九一七）年牧（穂高町牧区）の小林喜作が開道に着手し、岩をくだき這松を切り大正九年秋に開通している。その間人夫を集めても一ケ月もたゝないうちに逃出され一時は長男と二人で仕事を続けたという。更に翌十年秋には槍ケ岳殺生小屋を完成させ大衆登山時代を予見し、それに備えたという。

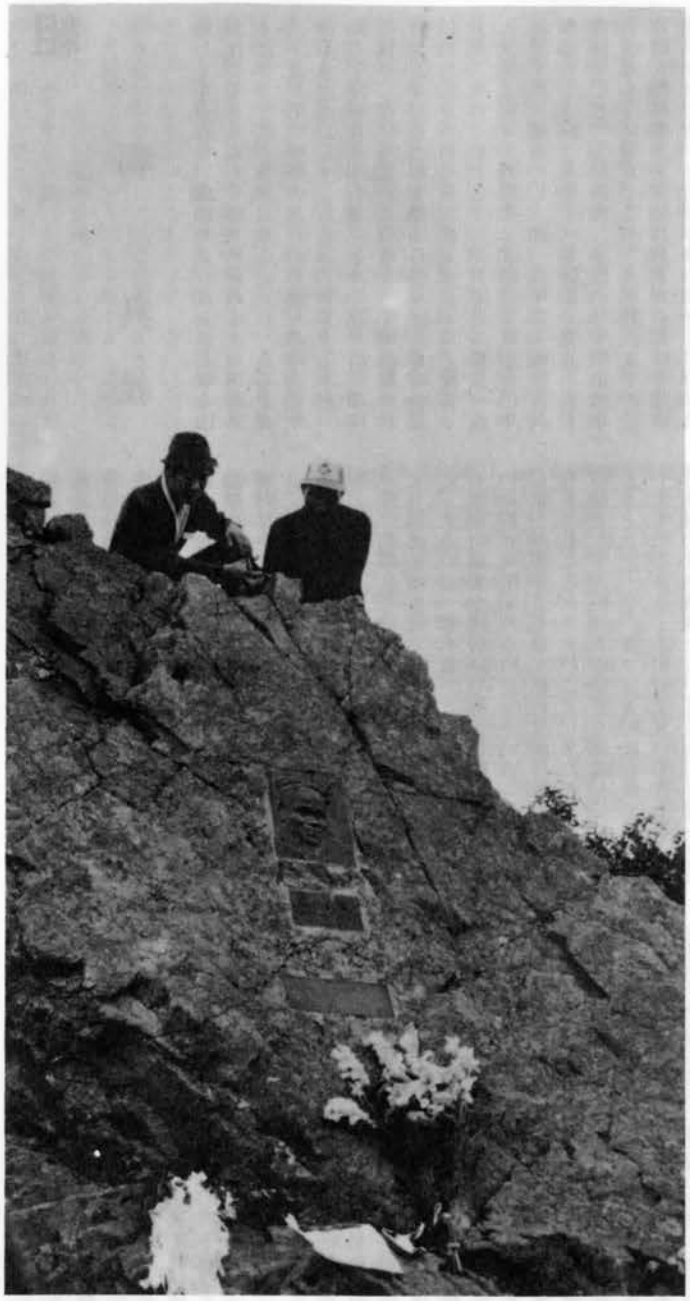
この喜作新道開削の功績を称えるため、昭和三十三（一九五八）年には新道分岐点近くに喜作のレリーフ（彫刻家故小川大糸作）を、更に昭和四十六年十月二十四日には、喜作祭実行委員会（委員長斉藤茂昌）により、文学作品喜作・新道の著者山本茂実等の参加を得て、第一回喜作祭が現地と中房温泉で行なわれている。その式辞（委員長斉藤茂昌）の一節に「南（上高地）にウエストン祭、北（針ノ木岳）に慎太郎等偉人を偲ぶ祭は数々……」と、述べ北アの山の三大祭になることを期している。

その後回を重ねて、本年は十二回目を計画している（穂高町観光協会）。ウエストン祭・慎太郎祭は夏山に入る初めに行なわれるのに対し、喜作祭はその終りに近づいた九月に行う習わしで、参加者は穂高神社に集合し、神事を行った後、神社を出発し、北廻り、南廻りコースの二班に分れ、燕岳（燕山荘）↑↓大天井岳（大天荘）↑↓常念小屋の各小屋に一泊計三泊し、新道分岐点のレリーフに班毎に神酒と玉串を捧げ喜作の冥福を祈った。昨年は広島、東京など全国から七十二名の参加者を得ている。

喜作は明治八年父玉蔵の次男として生れ幼少より山が好きで猟師として羚羊（くらしし）、熊を追い北アの峰々尾根を渡り歩き、天性の素質と頑健の体は後立山の猟師仲間からは南の親父と、日本の登山家からは牧の喜作として親しまれていた。雷鳥の生き血を牛乳がわりにし、熊の穴に入って寝たら熊が遠慮して出ていったというような、野性も持っていた。

大正十二年三月後立山爺岳西面棒小屋沢（富山側）で、小屋と共に大雪崩で圧死している。（喜作親子は圧死、猟仲間の五人は助っている）。

青木　治（穂高町郷土資料館長・大町山岳博物館嘱託）



喜作祭り（レリーフに神酒をそそぐ）　提供　穂高町観光課

松本藩大町組

幅具義

一、松本藩における大町組の位置

松本藩は、全国的にみて中規模の藩いわゆる中藩であったが、信濃国内において重要な藩であったので、江戸時代を通じて代々諸代大名の支配下におかれていた。その範囲は、現在の木曽郡を除いた中信地方、すなわち塩尻市・松本市・東筑摩郡・南安曇郡・北安曇郡・大町市の殆ど全域を藩域としている。南北約百キロメートル、東西約五十キロメートルに及ぶすこぶる長大な地域であったが、糸魚川・静岡地質構造線の大断層線によって形成される松本盆地が松本藩域の中央を南北に長く展開してこれが主要な生産基盤であり、東部はこれにつづく低山性山地利用の産業地域として存在し、西部および北部は高峻な山岳地帯であるため一部が林産程度に利用されるだけで生産が皆無に等しいといったことから、江戸時代初頭の天正の石直しの時点で朱印高八万五百二十三石余（二百五十五か村）、降って藩域に若干の減少をみた江戸時代中期以後は、朱印高が六万石となって明治維新におよんでいる。松本藩主には、江戸幕府成立以前に任じられた石川氏（天正一八～慶長一八年）をはじめとして、小笠原氏（慶長一八～元和三年）・戸田氏（元和三～寛永一〇年）・松平氏（寛永一〇～同一五年）・堀田氏（寛永一五～同一九年）・水野氏（寛永一九～享保一〇年）・戸田氏（享保一一～明治四年）と変遷しているが、このうち水野氏までの江戸時代初期の大名交替は目まぐるしい。途中松本藩域であったものが旗本領として分知または幕府領（天領）に変わった地域があり、これが前述の朱印高の減少となっている。

松本藩のうち大町組は、藩域内でも比較的南に偏って位置する城下町松本からすると、最も遠い松本藩の最北端に位置していた。松本藩は、塩尻・出川・山家・岡田・島立・庄内・会田・麻績の筑摩郡域八か組と上野・成相・長尾・保高・松川・池田・大町の安曇郡域七か組の計十五か組から成っていた。このうち大町組は、面積の上からみると、実に松本藩の三分の一を占めていて広大なものであったが、山地が多いことやその北部は冬季多雪の地帯である上に地味も低いことから、朱印高の上からは藩全体の約八分の一の一万石にも満たない生産力の低い土地柄であった。江戸時代中期の享保一〇年（一七二五年）代において村高寄せでは九千百五十九石余であり、江戸時代後期の文化七年（一八一〇年）代において九千四百三十六石余である。村数から見ても、松本藩全体二百五十五か村の約五分の一の五十四か村が大町組に存在するが、大町組の中心である大町村の約一千八百六石余を筆頭にする組南部の平坦地の諸村約十か村を除けば、北部の現小谷・白馬両村地域や東部の八坂・美麻両村地域にあった江戸時代の郷村はいずれも小村で、十軒程で一村を構成している極小規模村もみられる状態であった。

このように松本藩からみれば大町組は、生産力の上では比較的小さな組ではあるが、江戸時代初期までは軍事・交通上からすれば、北の越後と境を接する重要な位置にあったこと、あるいは、松本城下に越後から移入される物資の重要な流通路である糸魚川道約半分の道程が大町組内を経過していること、さらには、畑作中でも麻・楮の生産は大町組に依存するところが大きいこと、またこれらの集散地として大町村が中世から発達していたことなどによって、藩では大町組を重要視していたものである。大町村に江戸時代を通して松本藩の出先機関ともいえる大町他屋（別名大町陣屋）を置いていたことや、小谷地域には中世以来の千国口留番所を置いて糸魚川道の取締りや運上金取立てに当たらせたことは、大町組重視の一端といえる。

大町組はその地理的条件や古来の地域連帯の上から五つのブロックに分けられていた。いま江戸時代の呼称によってその地域を列挙すると、北から小谷・四か庄・山中・平・八ヶ郷の五つである。小谷は現小谷村域で七か村、四か庄は現白馬村域で十三か村、山中は現美麻・八坂両村域（一部現信州新町を含む）で十五か村、平は現大町市大字大町と大字平地域で十一か村、八郷は現大町市大字社地域で八か村をそれぞれ指している。以下地域の特色を概観してみることにする。

二、姫川沿いの小谷・四か庄

大町市佐野坂以北は冬季雪の多いことで知られている。西方に急峻な北アルプスを仰ぐ姫川沿いの小谷・四か庄の村々は、起伏の多い山間や平坦ではあっても姫川にそそぐ諸川のもたらした砂礫の多い土質に立地する村々であるために水田はあっても米生産の効率は低く、最高の収穫がある筈の上田においてさえ、反収玄米量一石に満たない村が殆どであった。八郷の宮本村あたりはその約二倍の収量があったのをみてもそれがいえる。したがって、畑作における雑穀生産や、麻生産あるいは小谷での養蚕といったものが生産の主体となっていた。

糸魚川道は越後糸魚川にはじまってこの小谷・四か庄を経由し松本方面へ通じていたが、山地と冬季の多雪のため姫川沿いの道は交通運輸上困難を極めており、そのために山道に適する牛での運輸が多く行われていた。ちなみに小谷・四か庄での牛馬飼育数をみると、明らかに牛の頭数の方が多いのは、それを物

天保5年(1834年)の大町組村高
—「信濃国郷帳」より—

	石				
宮本村	540.748	二重塩村	167.793	細野村	78.486
曽根原村	175.606	大切明村	160.444	飯福田村	264.078
関田村	237.031	大切平村	17.863	大方出村	147.491
丹生子村	69.479	久保村	212.046	大平村	70.331
相川村	22.010	大塚村	221.040	野森村	21.878
木船村	67.407	舟場村	109.972	飯沢村	182.487
館之内村	151.581	野平村	85.174	深沢峠村	31.764
常光寺村	107.372	左右地村	97.208	塩島村	102.781
松崎村	207.948	高地村	104.896	塩島新田村	102.081
野口村	289.725	千見村	50.950	蔵平村	60.899
大町村	1806.215	青具村	148.110	千国村	330.688
高根新田村	126.798	加蔵新田村	227.788	土谷村	303.739
借馬村	481.376	堀之内村	24.882	中谷村	165.079
木崎村	101.542	海ノ口村	271.749	深原村	76.344
森村	34.589	中綱村	189.002	石坂村	196.485
稲尾村	80.192	青木村	15.064	栗馬村	159.200
新行新田村	66.045	佐野村	14.687	大綱村	20.887
槍平村	14.772	沢渡村	172.047	（他に御朱印村として）	
			500.213	駒沢村	30.000

糸魚川道の荷宿

語っていよう。また冬の積雪は、牛の通行をも妨げ、そのような時は糸魚川道の運輸は人の背をかりていわゆる歩荷の力に頼らなくてはならない状態であった。また山地・多雪のために糸魚川道の各所に設けられた荷継宿はその間隔がせまく、平均荷宿間隔は一里余という極めて狭まいものになっている。

この地陣における糸魚川道の街道取締上の要衝として大網村と千国村がある。大網村は信越国境近くに位置するため村役人層に命じて道中取締が課せられ、国境を出入する諸荷の改めが行なわれていた。千国村は国境から南へ後退した位置にあるものの、小谷狭谷ののど首にあり、中世には軍事上の北の抑えとして重んぜられてきた。古くは千国庄の庄園政所も置かれたところであるが、江戸時代には口留番所が置かれて糸魚川道の交通運輸の取締や運上の取立てが行われた。江戸時代末期の諸荷物の運上銭取立帳によると、この番所を経由して領内に移入される物資には塩・肴（四十物とも称した）・木綿・金物・漆器・陶磁器・茶・薬などがあり、また移出される物資には麻・苴・木製品・大豆・麻布などがあり、百貨流通といったところである。千国口留番所には切米取の千国村百姓一人を常番として置き、ほかに知行取の松本藩の武士三人が月番交代で一人ずつ勤務するように規定されていた。これらの役人は、入荷からは鉄を除く何品からも運上銭を取立て、また出荷は穀物については同じく運上銭を取立てたり出麻については麻問屋の送手形または小谷村々の庄屋の改めを必要とし運上銭を課すなどの仕事をしていた。

四か庄の村々は、西に聳えている白馬連山の寒冷気候の影響を直かに受けることが多く、凶作を訴えて租税の減免を藩に願出ている年が多い。しかし麻生産も相当に行われていた。なお沢渡村の三日市場は中世沢渡氏の居館のあった所で沢渡村本郷であったが糸魚川道の関係から江戸時代には西山麓に村の中心が変わっている。

三、大町村と周辺の村々

大町村は中世とりわけ鎌倉時代に豪族仁科氏が仁科庄の支配のため現天正寺の位置に館を構えてから、その城下町的性格をもって発達した町である。下仲町を中心として五日町・八日町・六日町・九日町・十日町等、中世からの市町呼称が残っており、町割も中世に京都風の狭長な地割をしたままで江戸時代に受けつがれている。松本盆地北部の物資の集散地として果たした役割は大きく、特に大町村の東方の山地に立地する山中（現八坂・美麻両村）で生産されるところのいわゆる山中麻の集散地として中世以降栄えてきた。糸魚川道の中間にあって、この道を経由する諸荷の荷継宿として発展した。それだけに大町村荷宿と、松本町の問屋あるいは糸魚川に存在する信州問屋との間の街道運輸に関する出入もすこぶる多かった。

大町村の周辺村には、前述の山中村々のほかに平十か村・八郷八か村が存在した。さほど多収穫地帯とはいえないが、鹿島川・仁科三湖から導水の農具川・居谷里堰・横堰等の水利によって水田経営が行われてきた。しかし西方山地からの水は冷たく、近年に至るまで水口田を設けるなどして水温を高める必要があり、また鹿島川、高瀬川の氾濫による河川敷等のため地味は低く、米の生産力は低い方であった。しかし周辺村の中でも、南部に位置する八郷の村々は、東方山中から流出する沢水や、遥か北方より導水している居谷里堰・横堰等によって高瀬川河岸段丘の末端あるいは段丘直下に開かれた水田においてはかなりの米生産をみることができ、古代以来の豊かな水田経営をしていた痕跡が大きい。

大町組は前述のように松本城下から遠隔であったためと、越後と境を接する関係から、旧大町市役所の位置に大町他屋が設けられており、間口八間半、奥行約七九間の敷地内に長屋門・正庁・籾蔵・塩蔵・麻蔵・関塩蔵・高根蔵等が建てられていた。役人は藩からの武士が月番で来庁し地方の用務を処理していた。建物管理は大町村庄屋の責任とされていた。

四、租税からみた大町組

別表は江戸時代後期に属する文化七年（一八一〇年）の大町組五十四か村に宛てて発せられた租税の割付状いわゆる免状を集計したものである。順を追って見ていくと、先ず検地施行によって得られた村高の会計は、文化七年には九千四百三十六石六斗余になっている。これから九項目にわたる諸屋敷引きや欠損地あるいは可作田畑に関する年貢の減免が行なわれ、残高として七千八百八石八斗余が出され、これに村毎の土地柄の善悪に応じた免除率がかけられ結局七千三百十六石程が本途年貢又は本途物成と称するいわゆる正税割が決定する。しかしこれに附加税として納租手数料ともいうべき口籾や原野山林に課する野山手などが附加されるので、最終的には納籾として七千六百十二石六斗余が示される。ただ大町組は城下町にも遠く、米生産も少ない方であったため、江戸時代中期以降は金納所に切替えられるようになった。従って一旦各村の郷蔵へ納入された籾は金銀に替えられ、藩へ納入したものである。

これら正税のほかに小物成と称するいわば雑税がある。別表の後半にあるように、諸営業に対する税や薪代・楮代・山枡代などは銀貨や銭をもって納入するように示されている。また小杉紙以下の品々は、現物をもって納入するようになっている。小杉紙は江戸時代およそどの村にも紙漉が居り、そこで漉き上げたものである。胡桃・栗・渋柿・榛は各村々で穫れた果実であり、掻漆は山野の漆の皮から生産された粗漆である。楮の皮は山中の現八坂村あたりが主生産地であったが、量の多少はあっても広く大町組中北部村々に及んで生産納入されていた。慶安年代には、田畑の検地と併行して楮の木の検出が行なわれている。真綿は大町組のほとんどの村で養蚕が行われていたことによる納税である。蜡はいぼたの木を棲とするいぼたろう虫の巣から取れる純白の粉で、ろうそくの重要な原料であった。なお麻の租税がないのは、麻は籾換算されて納められるからで、租税面には顔を出していない。以上の租税を通してみて、多様な田畑・林野での生産があったことをうかがい知る。

文化7年（1810年）における大町組の租税集計（54か村分）

村高		9436石6033	大工役定納	銀 213匁 2分 8厘 0毛
引高		1627.7262	鍛冶役定納	〃 241. 7. 5. 0
内訳	百姓屋敷引	589.5080	木挽役定納	〃 87. 5. 0. 0
	郷蔵敷引	2.6790	紙漉舟役定納	〃 49. 5. 9. 0
	社領引	17.4383	鋳物師役定納	〃 7. 5. 0. 0
	口留番所敷引	.1120	川役定納	〃 34. 5. 0. 0
	前々永引	240.1838	屋丁銀定納	〃 49. 3. 3. 0
	千支改永引	269.0654	薪代定納	〃 29. 0. 4. 0
	田畑当流引	374.2970	楮代定納	〃 2164. 6. 4. 0
	当川捻	114.5917	山枡代定納	〃 19. 5. 0. 0
	田畑当川捻		杏仁代定納	銭 1貫 068文
	田方当川捻	19.8510	小杉紙定納	1320束 0分 0厘 0毛
残高		7808.8771	胡桃定納	1石 5斗 0升 0合
此取籾		7316.2989	栗定納	1. 4. 6. 0
外に	田方見取、畑方見取	19.1180	渋柿定納	3. 5. 2. 0
	水車屋敷見取（畝歩）	.6410	榛定納	7. 0
	口籾	220.0820	掻漆定納	20貫 346匁 8分 0厘
	野山手定納	46.7930	楮定納	259. 236. 0. 0
	紺屋役定納	4.3760	真綿定納	1. 200. 0. 0
	伯楽役定納	5.6900	蜡定納	40. 0. 0
納籾合		7612.6989		

（八坂第一小学校長）

七倉登山補導所雑記

田中保平

七倉登山補導所は、北アルプス高瀬入り七倉ダムに臨む登山基地〝七倉〟にある。「岳の町」大町の観光を考える大町市観光協会が建てた総合案内所である。

電源開発による渓谷の観光地化で、早急にこの種の施設をつくる必要が生じたことなど、理由は、いろいろあった。計画立案から一年、建設費のほとんどを寄付金でまかなうというきびしい〝お家事情〟の中で完成したのが一昨年九月のことだった。

山に理解を示した多くの人たちに改めて感謝申上げ、つくった施設が、その後、目的どおり機能し、十二分に効果を挙げていることをまずもって報告したい。

登山補導所、その名前の中の〝補導所〟の印象が、一般に好感を持たれていないことは事実である。私自身、〝補導〟ということばにはなじめない。広辞苑でいう〝補導〟は、おしえ、みちびく―ことである。もっとくわしく説明を加えると、悪いことをしないように、正しいことを教え指導することである。

〝補導〟ということばを、こんなふうに難しく考えなくてもよいのだが、一般的には、警察などで使うことが多いので、「補導する」などというと、だれもが抵抗を感じるらしい。

山の補導所は、登山者に立ち寄って貰わなければ意味がない。寄って貰うためには場所も考えなくてはいけない。場所ばかりではない、立ち寄って見たくなるようなふん囲気をつくらなくてはいけない。

七倉登山補導所は、そんな考えもあって、「登山総合案内所」の看板も一緒にかけてある。登山者が必ず立ち寄った、かつて「登山案内所」「山の案内所」になるようにという願いがあった。

探検、スポーツとしての登山が、道路の発達、車時代を迎えて、〝観光登山〟の色合いを濃くしている。補導の仕事も多様化し、駅前だけでは処理出来ない問題も出てきているのはたしかである。

たとえば、従来の駅前補導の仕事では、夜行列車で着いて、タクシーや、バスに飛び乗り、登り口まで一気にとばす登山者とのふれ合いは求めても無理である。ふれ合いがなくて、対話がなくては補導など満足に出来るものではない。

山の遭難事故防止、救助活動に欠かせない登山計画書や、登山者カードについて〝山と渓谷〟八月号がとり上げてくれた。行届いた調査、細かい資料で、登山者に「登山届」が絶対に必要であり、モラル以前に考えなければいけない当然の手続きであるという結論には共感する。

七倉登山総合案内所

「登山届」が一〇〇%出されて当然ということになるが、現実には、そうはいかない。届けが義務と考えてほしいと訴えるが、長野県では任意である。一〇〇%出して貰うためには工夫が必要だ。

登山者に必要性を理解して貰う―それには対話が必要である。対話の出来る環境をつくる―補導所の場所を考え、そして、補導所の抵抗感を和らげる手だてが必要である。こんなことが、協会幹部や、山仲間の間で論議、検討され七倉登山補導所が誕生した。

高瀬谷から入る登山道は幾つかある。そのどのコースも七倉の補導所を経由する。だから、この方面への登山は洩れなく立ち寄ってくれるという計算があった。

この建物は十坪余り、木造平屋建、テラスは玄関両サイドに広くとり、その床を高くして荷物を背負ったままで休息出来るように工夫した。伝言板もつくったし、セルフサービスで湯茶も用意してある。私も敢えて補導員の腕章はつけないことにしている。そんなことが関係しているのかどうかは知らないが、登山者はベテランも、初心者も関係なく立ち寄ってくれる。

テラスの軒先には緊急用の鐘を吊した。教会などにあるのと同じタイプの鐘である。山小屋ムードが気に入ったと、登山者ばかりでなく、観光客にもなかなかの人気である。

また建物の前に廃品の郵便ポストを据えて登山者カードや計画書、伝言入れに使っている。もち論、補導所不在の場合にだけ利用して貰うのだが、ホン物の郵便ポストに間違えられては困るので、赤い色を黄色く塗りかえ、登山者のための「安全ポスト」の名前もつけてある。

このポスト、テラスの鐘、同様、大変な人気で、グループの記念写真に撮る人が多い。ポストのある施設、場所を名所化して、関西の女子大パーティーが持参した登山計画書の地図の中に〝ポストのお山〟とか「ポストのある案内所〟とか記入していたのにはびっくりした。

環境が人を招くというのか、補導所は、このようにして、いつも賑わう。心配したカードの提出は一〇〇%である。ときには観光客も含めて休息所になったり、救護所になったり、そして遭難時には、家族の待機所にもなる。協会の前身だった「登山案内所」時代は、よくこうした風景があったように記憶する。

七倉登山補導所と、七倉登山総合案内所の二つの名前を持つこの施設は、遭難救助、防止活動だけの補導所ではなく、「岳の町」の案内所として、かつての「登山案内所」が再生したように思えてならない。

博物館だより

企画展　畦地梅太郎山岳版画展

わが国を代表する版画家の一人で、国画会会員、日本版画協会名誉会員の畦地梅太郎氏の版画展が特別展示室で開催される。

出品作は代表作である「白い像」「わかれ」「山に叫ぶ」など40点が展示される。

期間　七月二十五日より八月二十二日まで
入館料　大人三百円、高校生二百円、小・中学生百円
（二十名以上団体割引があります）

ライチョウ孵化

五つがいのライチョウが山岳博物館の飼育舎で産卵した後、抱卵を開始し、七月八日から七月十七日にかけて孵化した。三十羽の雛が順調に飼育されている。

山と博物館　第27巻　第7号
一九八二年七月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）